

物理

「ゆとりの教育」とは教育の開放・教育民営化・私学の役割

中井 浩二

編集長より「新指導要領導入と理科教育を思う」という主題について執筆の依頼を受けた。これは10年近くも昔にした議論である。物理学会の理事会や委員会で議論が繰り返され最後に日本物理学会・応用物理学会・日本物理教育学会の会長による合同のアピールをまとめたのが1994年であったと思う。その頃から事情は一つも変わっていない。繰り返される議論に空しさをさ感ずる。しかし、その議論を聞くと大半はテクニカルなことである。このような時は、原点に立ち戻って考えることが大切であろう。ここでは、新指導要領導入の背景として重要な「ゆとりの教育」について論じたいと思う。

「ゆとりの教育」という基本の考えが意味すること、そしてそれが導く結果はこれを唱えた人たちの意図が何であれ、また疑問を呈する人の心配がどの点にあるにせよ、教育の原点に立ち戻って考えると、「教育の多様性」を産むことになると思う。

そもそもこれまでの教育は、国の力によって教育が支配され、統一され、均等化され、「個」というものが押し潰されていた。明治の富国強兵策、欧米追随策から始まり、昭和の軍国主義、そして戦後の「民主主義」まで、教育を推進する理念の中に「個」が生きる姿はなかった。新憲法・教育基本法に基づく「民主的」な教育は敗戦という極限的な環境から立ち上がるために極めて有効であったが、いつの間にか国が支配する画一的で個性の育ち難い環境を作った。それには国の責任、官僚の責任もあるが、自らが責任を取ろうとしない国民の責任が

あると思う。そして「ゆとりのない教育」ができた。そこからの脱却は是非必要である。

「ゆとりの教育」それは教育の開放であると考えたい。国が責任をとる教育はこの線まででありその先は各人それぞれの生きざまに合った教育を選べると考えると、新しい教育の姿が見える。理科の教育はそのゆとりの中でやればよい。すべての人が物理学者になることはない。ゆとりの中で、俳句や詩歌をつくる人、歴史を学ぶ人、現代社会を論じる人もあろう。国が責任を持つ学校はその手前までで、もっと多様性に富む教育を「私学」や「塾」が展開すればよい。指導要領を超えた教育のための塾を作る。自由に教科書を作る。そんな教育への一歩であると考えられないであろうか？ 私学の役割が大きくなるべきである。それは教育の民営化の道であり、教育における規制緩和の道が開かれると考えたい。

ここで本学の創始者の精神が頭に浮かぶ。

富国強兵を軸に展開する明治の教育に異を唱え理学教育の重要性を訴えた21人の若者が自力で物理学講習所を始め、自力で運営した。「理学の普及により国運発展の基礎を築く」という建学の精神は、誇るべきものである。しかし、もっと大切なことはその裏にあった行動である。本学の原点は「世直し大学」であった。本学がいま社会のために何をすべきか真剣に考えるときであると強く感じる。

〔なかい・こうじ：理工学部物理学科教授〕